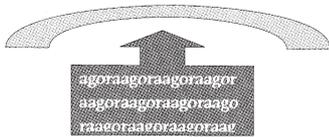


交流のひろば/agora—crosstalking—



空き家リノベーションプロジェクト

「まちの居場所」「ゲストハウス」づくり

—兵庫県丹波市青垣町佐治の地域再生を目指して—

出 町 慎・江 川 直 樹

今回は、関西大学の学生が、地元の職人や住民さらに専門家と協働し交流しながら、空き家となっている家屋の改善改修を通して地域の再生を目指す、「空き家リノベーション」プロジェクトについて紹介する。
キーワード：学生、空き家、改修、まちの居場所、ゲストハウス、地域環境、地域再生

1. はじめに

丹波市青垣町は兵庫県の中東部、日本海と瀬戸内海の間位置し、周囲を山に囲まれた人口約7,100人の町である。佐治の集落は、青垣町の中心に位置し、江戸時代は京・大阪を結ぶ古代山陰街道の宿駅として栄え、明治時代には製糸業により隆盛を極めた。現在も旧街道に沿って妻入り町家が立ち並ぶまちなみは美しく、当時の面影を残してはいるものの、人口の減少、店舗の閉店、空き家の増加等により、かつての活気は息を潜め、閑散とした町になっている。このままではこれから先10年、20年後には、この美しいまちなみ、や、豊かな山河の風景は一変してしまうのではないかと。美しい佐治の風景は、そのように我々の目に映った。



写真—1 山の上から見た青垣町佐治

2. 取組の内容

2006年9月、丹波市青垣町佐治を舞台に実施された日本建築学会創立120周年記念近畿支部主催事業「美しくまちをつくる、むらをつくる」設計・計画提

案競技に関西大学環境都市工学部建築学科の学生が応募し、丹波市長賞を受賞したことに始まる。その時、学生と教授とで議論を重ねる中から「関わり続けるという定住のカタチ」というキーワードが生まれ、我々の提案は今後の丹波市のまちづくりのシナリオとして説得力があると評価された。

その内容は具体的には、地域内に多く存在する空き家を改修し交流拠点やゲストハウスとして再活用する「空き家リノベーション」プログラムを通じて、学生が地域の人々と交流し、さらに学生がその後も途切れることなく地域に関わり続けることで、結果的に地域に常に学生が居続けることになり、過疎化に悩む地域に新しい「定住のカタチ」を生み出すというもので、さらには、都会育ちで故郷を持たない学生たちにとっては、関わり続けることで、豊かな山河に囲まれた「故郷」を持つことができると考えた。

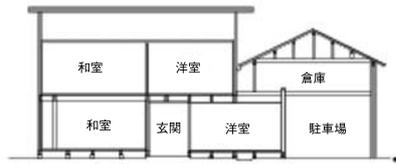
3. 空き家リノベーション

(1) 空き家の急増とまちの風景

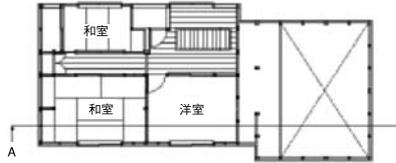
使われなくなった空き家は放置しておけば、急速に朽ちていき、まちなみや風景は失われていくだろう。空き家を改修し再活用することは佐治の風景を継承していく上で非常に重要であると考えた。

そこでまず1軒目の空き家では、1階を関西大学の学生たちの活動の拠点となる「佐治スタジオ」として、2階を、学生たちが容易にまちに滞在し、安価で宿泊できる「ゲストハウス」として整備することとした。

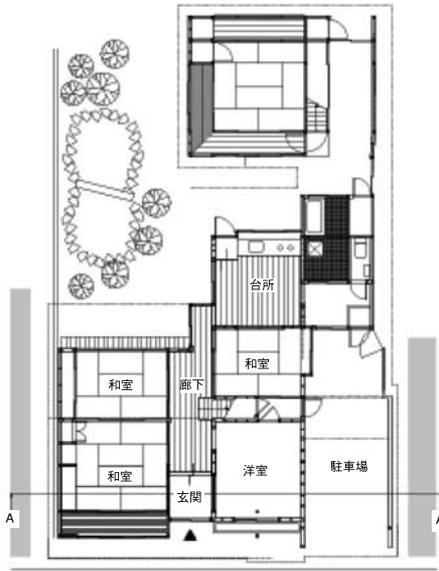
一方で、昔店舗であった土間空間が使われなくなり、住民の日常的な生活の場が道から遠ざかり、敷地の奥へ引っ込んでいることが分かってきた。これにより、日々の生活がまちで展開される機会が減ってきてお



A-A' 断面図



2階平面図



1階平面図

佐治スタジオ (改修前)



1階洋室の解体作業をする学生



1階洋室の解体後の様子



1階洋室の構造・断熱補強



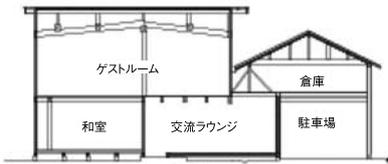
土台工事を行う学生



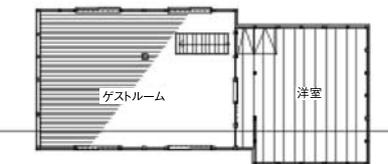
床材に45mmの杉板を使用



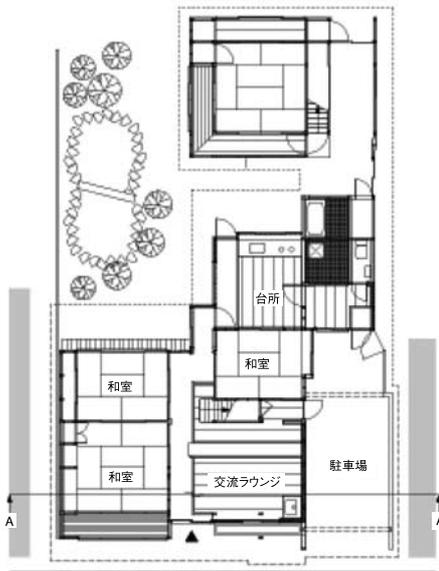
完成したカウンターのある交流スペース



A-A' 断面図



2階平面図



1階平面図

佐治スタジオ (改修後)



図-1 佐治スタジオ

り、学生だけでなく住民にとっても、気軽に訪れ過ごすことのできる「まちの居場所」が必要だと考えた。これらのことは、まちに長く滞在し、住民の方々と交流を重ねる中でその実現に確信を持ったことである。

(2) 設計図を描かない

改修の進め方として、通常なら実測をし、現況図を作成し、設計図を作成し、それに沿って改修作業を進めるのであるが、我々は事前に設計図を描かずに改修を進めることとした。それはすなわち、学生が主体と

なり地元職人や業者・住民・専門家が実際に協働で作業をしながら、現場で議論しながら改修の方向性やプラン、使用する素材等を決めていくという方法である。ここで重要なのは、この方法を採用することにより、建築を作るプロセスがまちの人々にとってオープンな状態にすることができるということである。現在、「建築」を取り巻く状況は「見えないこと・見えないもの」で溢れている。分業化された作業、プレハブ住宅や建売住宅の増加といった流れの中で、「建築」はそこで暮らす人々や地域から離れてしまっているように感じる。プロセスをオープンにすることで、学生たちの作業に地域の方々が飛び入りで参加したり、作業風景を気軽に覗いていたりといったプロセスの共有が起これば、「建築」と地域が連続した状態を作り出すことが可能になると考えた。

(3) 議論しながら作る

「佐治スタジオ」として借用した空き家は築80年の町家だが、40年ほど前の改修によって室内の床や壁、天井の大部分が新建材で覆い尽くされた状態になっていた。まずは、この家を元の姿に戻すことにした。玄関・廊下・道側に位置する洋室・台所・洗面所の解体作業を進めていった。天井をめくれば、元の民家の屋根が姿を現し、昔の民家の作りの魅力を感じた。しかし洋室の壁をめくれば鉄の波板1枚で外と接している、断熱材もなく構造的にも弱い状態、上を見上げれば、室内から空が見える…冬の壮絶な寒さにも納得がいった。解体を通じて40年前の改修のずさんさや地域の環境での暮らしへの配慮の欠如を肌で感じた。

悪戦苦闘しながらも洋室、玄関、廊下、台所の解体が終わると、道から裏庭まで自由に土足で歩きまわれるようになった。すると、表から裏まで抜けられるのが気持ちいいという話になり、通り土間を作ろうということになった。さらに道に面する洋室は土間にして地域の人々との交流スペースとして、外から気軽に入ってきてもらって、かつ、中での活動がまちににじみ出るようにしようということになった。こうして皆の議論の中から、改修の方向性が決まっていた。

(4) 地域資源を活用する

青垣町は地域の80%を森林が占めており、かつては林業の盛んな地域であったのだが、今では間伐等の管理が困難になり、荒れた山が多くあることが地域の問題となっている。我々は、改修を行うにあたっては、地域の木材をたくさん使おうと当初から決めていた。

まず、板の間の床には45mmの杉板を敷き、壁は

柱間を木材で補強した上に15mmの杉板を貼ることとした。断熱材も使用したが、分厚い木材は断熱効果を持っており、その特性を生かすことで熱環境を整えることができるのである。さらに、分厚い木材を面として使用することで、構造的な補強の効果も得ることが期待できた。また、木材は様々な美しい表情を持っており、室内の化粧材としてそのまま使用することにした。このように木材を「断熱」「構造」「化粧」という面から評価し使用することで、地域資源の活用が促されると考えた。

さらに2階でのゲストハウスづくりでは、3つの部屋に仕切っていた壁を取り払い、ワンルームの状態にした上で、屏風のような伝統的な可動式建具で用途・季節等に合わせ空間をゆるやかに仕切ることができるように考えた。床には45mmの杉板を使用し、立派な小屋組みを見せるように、垂木に沿って12mmの杉のピーリング材を貼って熱環境を整えた。壁は元々の荒壁の上に地元の土を使った土壁を塗り直して仕上げた。

4. 改修を通じて地域環境をデザインする

改修作業で重視したのは、「地域の人でもできる程度の改修を行う」ということだ。当初、洋室は床暖房入りの土間にする案があったのだが、そのためには専門的な大工事が必要になってしまう。結果的に45mmの杉材を貼った「木の土間」にすることになった。要するに、改修のプロセスをオープンにし、スタジオを訪れた住民の方々が「自分の家もこうしよう、あーしよう」「これなら自分でもできる」と思ってもらえることが重要だと考えた。そうすることで我々の提案が、「佐治スタジオ」の改修のためだけに完結せず、地域に広がり、影響を与えることが可能になるのである。

我々の改修は、ただ一軒の空き家を改修することだけが目的ではなく、改修を通じて、分断されてしまっている「ひと」「いえ」「まち」「地域」の関係を連続させていくことであり、地域環境をデザインしていくことである。この先に、佐治の美しい風景の維持・継承そして地域の再生が見えてくると考える。当然、我々の活動がすぐに効果を発揮し、地域に影響を与えるとは考えていない。むしろ、長い時間をかけて地域と関わり、多くの人との交流や議論から見えてくる課題や魅力を共有することが重要ではないだろうか。

完成した「佐治スタジオ」の格子戸から漏れ出す、学生や住民の方々の生き生きとした表情や笑い声がまちに彩りを与え、生活の匂いや気配を伝える。空き家



写真—2 交流ラウンジで談笑する住民と学生達

※なお、この活動は文部科学省「平成19年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択され、助成（H19-H21 予定）を受けている。

リノベーションは、これからも継続していく。次はどのようなカタチで地域に新しい表情を付け加えていくか、皆と議論を重ねながら進めていきたい。

JCMA

【筆者紹介】

出町 慎（でまち まこと）
 関西大学 環境都市工学部
 TAFS 佐治スタジオ
 研究員



江川 直樹（えがわ なおき）
 関西大学 環境都市工学部
 建築学科



「建設機械施工ハンドブック」改訂3版

近年、環境問題や構造物の品質確保をはじめとする様々な社会的問題、並びにIT技術の進展等を受けて、建設機械と施工法も研究開発・改良改善が重ねられています。また、騒音振動・排出ガス規制、地球温暖化対策など、建設機械施工に関連する政策も大きく変化しています。

今回の改訂では、このような最新の技術情報や関連施策情報を加え、建設機械及び施工技術に係わる幅広い内容をとりまとめました。

「基礎知識編」

1. 概要
2. 土木工学一般
3. 建設機械一般
4. 安全対策・環境保全
5. 関係法令

「掘削・運搬・基礎工事機械編」

1. トラクタ系機械
2. ショベル系機械
3. 運搬機械
4. 基礎工事機械

「整地・締固め・舗装機械編」

1. モータグレーダ
2. 締固め機械
3. 舗装機械

- A4版／約900ページ
- 定 価
- 非 会 員：6,300円（本体6,000円）
- 会 員：5,300円（本体5,048円）
- 特別価格：4,800円（本体4,572円）

【但し特別価格は下記◎の場合】

◎学校教材販売

〔学校等教育機関で20冊以上を一括購入申込みされる場合〕

※学校及び官公庁関係者は会員扱いとさせていただきます。
 ※送料は会員・非会員とも沖縄県以外700円、沖縄県1,050円

※なお送料について、複数又は他の発刊本と同時申込みの場合は別途とさせていただきます。

●発刊 平成18年2月

社団法人 日本建設機械化協会

〒105-0011 東京都港区芝公園3-5-8（機械振興会館）

Tel. 03 (3433) 1501 Fax. 03 (3432) 0289 <http://www.jcmanet.or.jp>